

2022/5/19

アヴァンギャルド勃興 近代日本の前衛写真

Avant-Garde Rising: The Photographic Vanguard in Modern Japan

2022年5月20日(金) - 2022年8月21日(日)



平井輝七 《風》 1938年 東京都写真美術館蔵

撮影者不詳 《イルフ逃亡》 1939年 福岡市美術館蔵



近代日本写真史における前衛写真は海外から伝わってきたシュルレアリスムや抽象美術の影響を受け、1930年代から1940年代までの間に全国各地のアマチュア団体を中心に勃興した写真の潮流です。活動時期が大変短い時期であったことなどで、その活動内容についてのあまり検証がなされていませんでした。しかし近年各地の美術館によりその活動の研究が進み、海外でもその活動が注目されています。

それまでも写真にとって絵画の影響は強いものでしたが、前衛写真は画家だけではなく詩人やデザイナーなどが参加し、その活動の幅を広げていました。特に1937年に瀧口修造が山中散生(ちるう)とともに企画した「海外超現実主義作品展」が東京で開催(のち京都・大阪・名古屋・福井を巡回)されたことによって多くの写真家が触発され新しい表現へ向かい、画家たちは写真を使って、絵画では出来ない表現に挑戦していきました。

しかし、戦時下体制の強化とともに前衛表現は規制を受け、1939年には時局への配慮から多くの前衛写真のグループは名称を変更せざるを得なくなります。1941年に瀧口が逮捕され、写真雑誌が統合され、また多くの写真材料の輸入が困難となり、各地で行われていた活動も収束へと追い込まれていきます。

本展では、同時代に流行した前衛絵画との関係性なども考慮にいれ、シュルレアリスム運動とどのように関わっていったのか今回の展覧会によって詳らかにします。

みどころ

1 日本写真史においていまだ謎が多い「前衛写真」を展覧する当館初の展覧会

1920年代末から日本写真界では、それまで絵画の影響を受けていた写真表現から脱却し、カメラやレンズによる機械性を生かして、写真でしかできない表現を目指した新興写真運動が活発になりました。新興写真の芸術的表現をより深化させた「前衛写真」は1930年代から展開されますが、1941年に太平洋戦争が始まると、自由な表現活動がほぼ不可能となり、終焉を迎えます。わずか数年の活動であったこと、戦時中にオリジナル・プリントや史料の焼失が激しかったこと、また新興写真を含むこの時代の芸術写真が日本写真史においてサロン写真と呼ばれ軽視されてきた背景から、前衛写真の研究が進んだのはここ20～30年の動きです。本展では、戦後の主観主義写真や、1950年代半ばに再度現れるシュルレアリスム表現との関係にも触れながら、日本の前衛写真の本質に迫ります。

2 日本各地で勃興した前衛写真の全体像を俯瞰

前衛写真は、1937年の「海外超現実主義作品展」開催を機に日本各地で結成されたアマチュアを主体とした写真クラブによってけん引されました。所属していた会員は画家や詩人など、写真というジャンルにとどまらず、写真誌での写真論の発表や、新しい写真表現の実験を繰り返し、各クラブはそれぞれに個性を持ちながら活動しました。前衛写真の研究が進められる中で、近年では福岡市美術館「ソシエテ・イルフは前進する 福岡の前衛写真と絵画」展(2021年)、名古屋市美術館「坂田稔 —『造型写真』の行方」展(2018年)、同「『写真の都』物語—名古屋写真運動史:1911-1972—」展(2021年)など、各地方の前衛写真グループを紹介する展覧会が開催されています。東京都写真美術館では、関西、名古屋、福岡、東京の前衛写真グループの作品約150点を各章に分けて紹介し、前衛写真の全体像を展覧します。

3 国内外で注目が高まるシュルレアリスム

20世紀最大規模の芸術運動であるシュルレアリスムは、パリで発祥したのち、第二次世界大戦前のヨーロッパ各都市からアメリカや日本を含む世界各地に影響を及ぼし、文学や美術だけではなくファッション界をも巻き込む大きな流行を作り出しました。シュルレアリスムは今なお高い注目を集めており、「Shock of Dalí ショック・オブ・ダリ —サルバドール・ダリと日本の前衛—」展(三重県、福島県、2021年)や「さまよえる絵筆—東京・京都 戦時下の前衛画家たち」展(京都府、2021年)など日本のシュルレアリスム絵画をテーマとする展覧会が相次いで開催されたほか、海外では日本人作家を含む大規模展覧会「SURREALISM BEYOND BORDERS」がメトロポリタン美術館(ニューヨーク、2021-22年)、テートモダン(ロンドン、2022年)で開催。特に絵画表現において人気が高いシュルレアリスムですが、前衛写真の領域においても、純粋な視覚表現から、広告やファッションに至る多方面に浸透し重要な役割を果たしました。



左から

小石 清《疲労感》〈泥酔夢〉より
1936年 東京都写真美術館蔵、

高橋 渡《……》1937年 個人蔵、

濱谷 浩《東京浅草 花月劇場 舞台裏で出を待つ踊り子》〈東京〉より
1938年 東京都写真美術館蔵

展覧会構成

第1章 インパクトー同時代の海外作家

前衛写真が大阪を中心に盛んとなるきっかけは、雑誌や写真集などを中心に同時代の海外の作家の作品に触れたことでした。『フォトタイムス』（1924年創刊 フォトタイムス社）『アサヒカメラ』（1926年創刊 朝日新聞社）などの写真雑誌のグラビアページや海外作家特集などにおいて、ウジェーヌ・アジェ、マン・レイなどの作家が紹介されます。また雑誌のグラビアだけではなく、実際の展覧会として展示されたのが、1931（昭和6）年に開催された「独逸国際移動写真展」と1937（昭和12）年に開催された「海外超現実主義展」でした。この2つの展覧会は東京だけではなく大阪などにも巡回しており、衝撃をうけた、と多くの作家が書き残しています。写真美術館の収蔵作品の中から、この時代に発表されたヨーロッパの写真家の作品を紹介します。

出品作家…マン・レイ、ウジェーヌ・アジェ、ハンス・ベルメール、アルベルト・レンガー＝パッチュ、セシル・ビートン、ブラッサイ



左から ウジェーヌ・アジェ《日食の間》1912年、マン・レイ《カラー》1930年頃、ハンス・ベルメール《人形》1935年
すべて東京都写真美術館蔵

第2章 大阪

日本の前衛写真は関西から広がっていったといっても過言ではないでしょう。その中心にあったのはアマチュアの写真家が集い、活動をしていたグループでした。「浪華写真倶楽部」は1904（明治37）年に創立され、現在でも活動を続けているもっとも古い写真クラブです。このクラブに所属している作家の中には1930年代に入った頃、それまで盛んであった絵画的な影響の強いピクトリアリズム写真から、欧米からの新しい写真に影響をうけた新興写真へとその作風を変化させていった人たちがいました。その「浪華写真倶楽部」から先進的な作品の制作を目指した上田備山、安井仲治を中心とし1930（昭和5）年に「丹平写真倶楽部」が結成されました。また同年にはヨーロッパから帰国し、芦屋に移り住んだ中山岩太を中心に「芦屋カメラクラブ」も結成されます。その後、1937（昭和12）年に開催された「海外超現実主義展」から強い影響をうけた平井輝七、本庄光郎らが同年に「アヴァンギャルド造影集団」を結成します。これらのグループの作品を通して、もっとも盛んに前衛写真の活動を行った関西の写真家の作品に注目します。

出品作家…中山岩太、村田米太郎、安井仲治、河野徹、小石清、天野龍一、平井輝七、樽井芳雄、本庄光郎、椎原治、田淵銀芳、服部義文、矢野敏延、小林鳴村、音納捨三、ハナヤ勘兵衛



左から 平井輝七 《月の夢想》1938年、安井 仲治《題不詳(シルエットの構成)》1938年頃、天野龍一 《オートグラム 代謝》1938年 すべて東京都写真美術館蔵

第3章 名古屋

名古屋の前衛写真は評論家や詩人、写真家が協同するような形で結成されていきます。日本にシュルレアリスムを紹介した中心的な人物でもある評論家で詩人の山中散生、画家の下郷羊雄が中心となって結成された「ナゴヤアバンガルド倶楽部」の写真部会が独立し、1939（昭和14）年に「ナゴヤ・フォトアヴァンガルド」が結成され、詩人の山本悍右も参加します。その中心にいた人物が坂田稔です。坂田は大阪在住時代に浪華写真倶楽部に所属し、1934（昭和9）年に「なごや・ふおと・ぐるっぺ」を結成しました。また『カメラアート』（1935年創刊 カメラアート社）や『フォトタイムス』などの写真雑誌に自身の写真論を展開し、名古屋のアマチュア写真家の同人誌である『カメラマン』（1936年創刊 カメラマン社）の中で「前衛写真再検討座談会」で中心的な発言を行います。彼は福岡を訪問し、ソシエテ・イルフのメンバーにも影響を与えていました。

出品作家…坂田稔、田島二男、山本悍右、後藤敬一郎



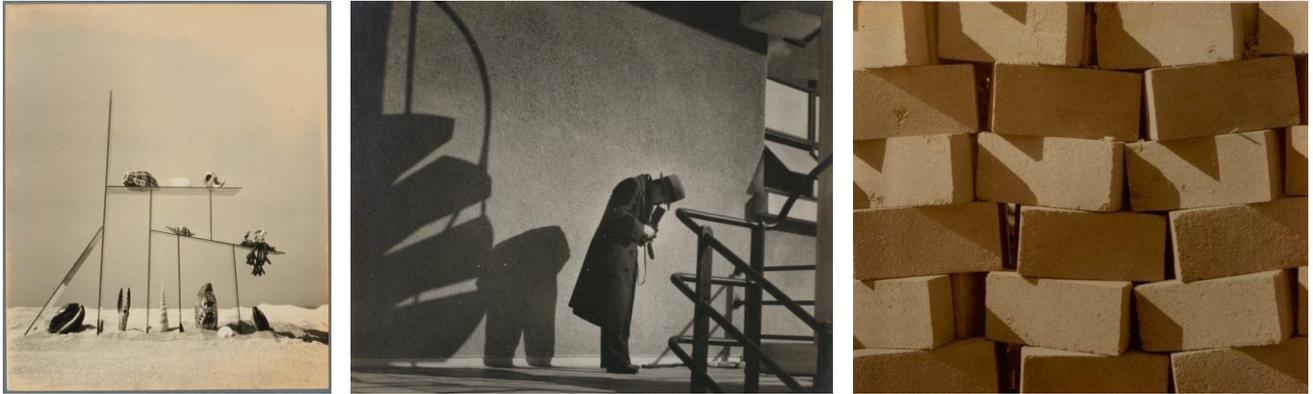
左から 後藤敬一郎《最後の審判図》1935-40年、後藤敬一郎《帰らぬ舞台》1935-40年、山本悍右《(脱衣棚と椅子)》1935年頃
すべて東京都写真美術館蔵

第4章 福岡

「ソシエテ・イルフ」は1939（昭和14）年から1940（昭和15）年まで福岡で活動した前衛美術グループです。「古い(フルイ)」の逆さ読みで「イルフ」と名乗り、彼らはシュルレアリスムや抽象芸術といった「新しい」美のありかたを探求し、実践しました。主なメンバーは、地元のアマチュア写真グループに参加していた高橋渡、久野久、許斐儀一郎、田中善徳、吉崎一人（遅れて参加）と、後にデザイナーと

して知られる小池岩太郎、画家の伊藤研之の 7 名です。他の地域のグループと異なるのは、全員が写真を扱うわけではなかった点です。また結成は 1939 年と他の地域に比べ遅かったものの、それぞれは 1920 年代の後半から作品の発表を始め、「アシヤ写真サロン」や「全関西写真連盟撮影競技」などに参加しており、伊藤も二科展などに出品し、福岡の中だけにとどまらずに制作活動を続けていました。

出品作家…高橋渡、久野久、許斐儀一郎、田中善徳、吉崎一人、伊藤研之



左から 久野久《海のショーウィンドウ》1938 年 福岡市美術館蔵、吉崎一人《題不詳(カメラを覗く人)》1938-1941 年頃 東京都写真美術館蔵、許斐儀一郎《題不詳》1940 年 個人蔵

第 5 章 東京

東京で前衛写真の活動の中心となったのは、『フォトタイムス』の後援によって、1938（昭和 13）年に瀧口修造、永田一脩、奈良原弘らを中心に設立された「前衛写真協会」でした。メンバーにはほかに、阿部芳文（展也）、今井滋、濱谷浩、西尾進、田中雅夫などがおり、写真家だけでなく画家も複数参加しています。瀧口は『フォトタイムス』などに前衛写真に関する論文を寄稿し、その後も、写真に関する文章をさまざまな雑誌に執筆して、協会の精神的な支柱となっていました。雑誌のグラビアページに掲載された当時の前衛写真の紹介では、写真家ではなく画家の作品が数多く取り上げられており、写真を使って新しい表現を目指す画家たちの意気込みが感じられます。また瑛九や恩地孝四郎はこういったグループなどの活動とは別に、フォトグラムやフォトモンタージュによる前衛的な写真作品を発表していました。

また『フォトタイムス』の後援によって「青年報道写真研究会」も同じ頃に結成されており、土門拳、藤本四八、濱谷浩らが参加しています。1941（昭和 16）年に『フォトタイムス』は戦時雑誌統廃合のために『報道写真』と名前を変更します。前衛写真の活動は急速に表舞台から姿を消していくことになりました。

出品作家…永田一脩、恩地孝四郎、瑛九、濱谷浩



左から 瑛九〈フォト・デッサン〉より 1939 年、永田一脩《火の山》1939 年、恩地孝四郎《葉脈とカニ、トンボ》〈博物誌〉より 1942 年
すべて東京都写真美術館蔵

出品点数 183点 (写真作品 174点、写真集 3点、雑誌 6点含む)

関連イベント

会期中に以下の教育普及プログラムを予定しています。詳細は決定次第ホームページに掲載します。

- ・フォトグラム・ワークショップ (展覧会レクチャー付)
- ・手話通訳による展覧会トーク
- ・じっくり見たり、つくったりしよう (親子対象)

展覧会図録

「アヴァンガルド勃興 近代日本の前衛写真」

A4 判変型、224 頁 (予定) / 3,960 円 (税込) / 国書刊行会発行

イエレナ・ストイコヴィチ (オックスフォード大学) および藤村里美 (東京都写真美術館学芸員) によるテキストほか出品作品全図版を掲載。

開催概要

展覧会名[和] アヴァンガルド勃興 近代日本の前衛写真

展覧会名[英] Avant-Garde Rising: the Photographic Vanguard in Modern Japan

主催 東京都、公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館

会期 2022 年 5 月 20 日(金) - 2022 年 8 月 21 日(日)

会場 東京都写真美術館 3 階展示室

〒153-0062 東京都目黒区三田 1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内

電話 03-3280-0099 www.topmuseum.jp

開館時間 10:00-18:00 (木・金は 20:00 まで) 入館は閉館 30 分前まで

休館日 毎週月曜日(月曜日が祝休日の場合開館し、翌平日休館)

観覧料 一般 700 円 / 大学・専門学校生 560 円 / 中高生・65 歳以上 350 円

※小学生以下及び都内在住・在学の中学生、障害者手帳をお持ちの方とその介護者(2名まで)は無料。

※本展はオンラインによる日時指定予約を推奨します。詳細はホームページをご参照ください。

このリリースのお問い合わせ先

このリリースに掲載されている図版をデータにてご用意しております。

掲載をご希望の際は、広報担当までご連絡ください。

* 図版をご掲載の際は、必ず作品キャプションおよびクレジットの表記をお願いします。

* 図版の無断掲載はご遠慮ください。また、トリミング、文字掛け等の加工はできません。

東京都写真美術館 〒153-0062 東京都目黒区三田 1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内

TOKYO PHOTOGRAPHIC ART MUSEUM 電話 03-3280-0034 / FAX 03-3280-0033 / www.topmuseum.jp

展覧会担当 藤村 里美

広報担当 池田 良子 / 平澤 綾乃 / 鈴木 彩子 press-info@topmuseum.jp

本展は諸般の事情により内容を変更する場合があります。最新情報は当館ホームページをご確認ください。